生活文化史

Seikatsu Bunkashi

＜史料館だより＞

目　　次

◇丹波哲郎の曽祖父と種痘を広めた深山玄石…… 大国　正美（2）
◇嘉納治五郎と東灘…… 道谷　　卓（4）
◇深江にあった戦争　1 …… 深　江　塾（9）
◇深江物語（8）
　唱歌「春の小川」「故郷」を思わせる風景 …… 森口　健一（17）
◇図書室サービスコーナーと児童館分室設置…… 史　料　館（22）
◇博物館実習とトライやるウイーク…… 史　料　館（23）
◇史料館日誌抄…… 道谷　卓・藤川祐作（24）

2018.3.31
NO.46

神楽町（現・深江南町一丁目）から北を眺望した1950年代の写真である（西土井敏氏提供）。手前の畑は1977年に市営深江南住宅が建てられた。真ん中あたりに田畑作業用の道具を入れる小屋のような造作物があった。その向こうに見える白い建物は変電所で、きわめて珍しい写真である。右手の杜は旧岡田茂義邸。大林組が1938年に建設した木造２階建ての洋風住宅が現存している。

神戸深江生活文化史料館

生活文化史№46④.indd　1　　2018/05/21　8:27:38

丹波哲郎の曽祖父と種痘を広めた深山玄石

史料館長　大国正美

幕末に種痘を広めた深山玄石

史料館の収蔵史料は深山家から寄贈された史料が大半を占めている。深山家は家伝によれば、元は戦国大名今川義元の家臣だったが、六代目加兵衛が元禄十二年（一六九九）大坂で医業を開業、深江に別宅を設けた。文化三年（一八〇六）十一代宋詮のとき、大坂の自宅が火災に遭い、以来、深江に移住し代々医師を務めている。幕末の当主深山玄石は、幕末の名医・緒方洪庵と並び「学の緒方、術の原」と賞された流行医・原老柳の門下生となった。

緒方洪庵は嘉永二年（一八四九）二月、大坂・古手町に除痘館を開設し、十一月に分苗所三カ所を設けたのを皮切りに、各地に種痘を広めるが、深山玄石は嘉永三年一月に分苗所となった（梅溪昇『緒方洪庵と適塾』一九九六年）。深山玄石が種痘に関わったのは、師である原老柳が緒方洪庵の種痘事業の賛同者に名前を連ねていたためだろう。しかし種痘は体に悪いという悪説が流布し、初期の普及は苦難の連続だった。安政五年（一八五八）ようやく官許を得て慶応三年（一八六七）五月に除痘館は公館となり、三人から五人の組合を定め、町村を担当させた（松本瑞編『大阪市種痘歴史』）。

この直後の慶応三年十月に深山玄石に大阪種痘館から与えられた免許状が現存している。宛先は「丹波元禮組合　摂州兎原郡深江村　深山玄石方」とあって二つ茶屋村（現・神戸市中央区元町通）の丹波元禮と「組合」を作っている。ところが深山玄石は同月付で西宮浜石在町の吉田良作とも組合を作っている（『西宮文化』二四号）。なぜ深山玄石は複数の組合を作ったのだろうか。

その理由は、種痘の技術的な限界にあった。当時、痘苗（ワクチン）はすぐ腐敗して保存が困難で、人の腕に痘苗を接種してできた膿を次の人にすぐ接種していくことが必要だった。悪評が流布して接種希望者が少ない中で、近隣の種痘医が接種対象者を融通しあう相互扶助の仕組みとして組合が設けられたのである（古西義麿「丹波元禮組合宛ての大阪種痘館「分苗免状」について」『除痘館記念資料室だより』第三号、二〇一一年）。

種痘関係では深山家文書に残る「姓名録」と題した種痘カルテが貴重である。患者一人に対して短冊一枚に接種場所を記載したもので、安政六年から明治七年（一八七七）まで一四束、延べ一一三四人分の記録が残っている。これら幕末の種痘史料は全国でも少なく、医学史研究者から注目されている史料で、現在史料館で展示中である。

なお玄石は免許状を発行された直後の慶応四年十一月に急逝、次男の玄碩が跡を継いで医師となり、明治四年、兵庫県から種痘の免許をもらっている。その跡は養子の広三郎―杲―健二―鉄平氏と医業を継承している。広三郎は日清・日露戦争に軍医として従軍、大正二年（一九一三）から四年間本庄村長も務め、芦屋川の改修、精道村と組合立伝染病隔離病院の建設、川崎商船学校（現・神戸大学海事科学部）の誘致を行った。

丹波元禮の家系と俳優丹波哲郎・義隆父子

二〇一五年九月四日放映のNHK番組「ファミリーヒストリー」で俳優・丹波哲郎・義隆父子が取り上げられ、丹波元禮が紹介された。丹波哲郎の曽祖父が丹波元禮であり、史料館でも取材・撮影が行われ、ほんの数秒間映像が流れた。

丹波家の先祖は永観二年（九八四）に「医心方」という現存最古の

生活文化史№46④.indd　2　2018/05/21　8:27:38

医薬書をまとめ、宮中に献上した丹波康頼だという。「医心方」は医学総論・療法・保健衛生・養生法・医療技術・医学思想・房中術など三〇巻で構成され、二七巻が平安時代に、一巻は鎌倉時代に書写され、残りは江戸時代に補われた。中国の唐の医学書を引用しており、文献学上非常に重要な書物である。「医心方」は戦国時代に典薬頭半井家に下賜された。

丹波家はその後、多紀家と改姓し江戸幕府の医官となり、幕末に、江戸幕府の命を受け半井家に伝わっていた「医心方」を校訂して復刊した。半井家に伝わっていた「医心方」は、文化庁が買い上げ一九八四年、国宝となっている。

元禮の三男丹波敬三（一八五四～一九二七）は、明治・大正期の日本の薬学の開拓者である。丹波敬三は東京大学製薬学科（現在の薬学部）第一期の卒業生で、ドイツに自費留学して衛生学・裁判化学を学び、母校の東京帝国大学医科大学薬学科教授となり、梅毒治療薬を国産化した。薬事法の概要の制定に関わり日本の近代薬学の基礎を築いた。日本での裁判化学の草分けでもある。

展示ケースの寄贈受けエントランスに医事史料コーナー

深江にあるレア・アースの総合メーカー株式会社三徳が作った社団法人「希」から、二〇一七年十二月、展示ケース二台の寄贈を受けた。一九三七年に三徳工業株式会社として創業、戦後再編して三徳金属工業株式会社となりレア・アース分野に進出した老舗で、二〇〇〇年に現在の社名に変更。昭和30年代より希土の分離精製技術を高め原料から高純度化合物、各種希土金属・合金を一貫生産している。

展示ケース寄贈は社団法人「希」の地域貢献活動として打診があり、これを機に展示を大きく見直した。医事史料はこれまで二階の一番奥の部屋にあったが埋没感があった。このため一階を史料館発足のきっかけとなった深山医事史料コーナーに特化。医事史料を前面に出し、収蔵庫に収めていた珍しい医療器具も新たに並べることにした。一階にあった「本庄のうつりかわり」コーナーは二階の土器展示を整理して移動し、古代から近現代への時間軸で展示を再構成していく。寄贈されたもう一台の展示ケースは見学希望の多い深江文化村のコーナーとした。文化村の成り立ちや変遷、生まれた文化や現状、使われていた品々などを展示している。

寄贈いただいた社団法人「希」と株式会社三徳に厚くお礼申し上げるとともに、ぜひ史料館にお立ち寄りいただき、先駆的な医事史料に触れていただければと思う。

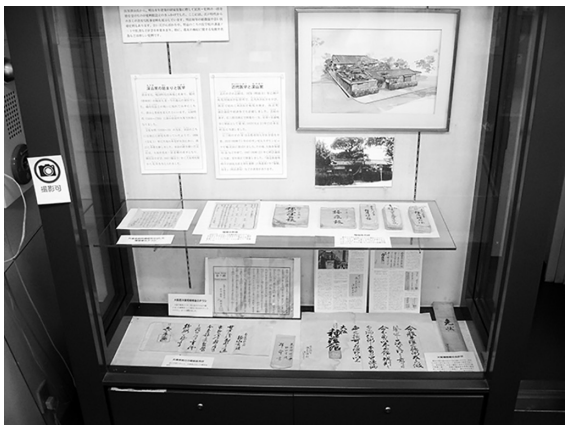


写真１　深山家の貴重な種痘資料を集めたコーナー

写真２　寄贈ケースによる深江文化村展示

生活文化史№46④.indd　3　2018/05/21　8:27:38

嘉納治五郎と東灘

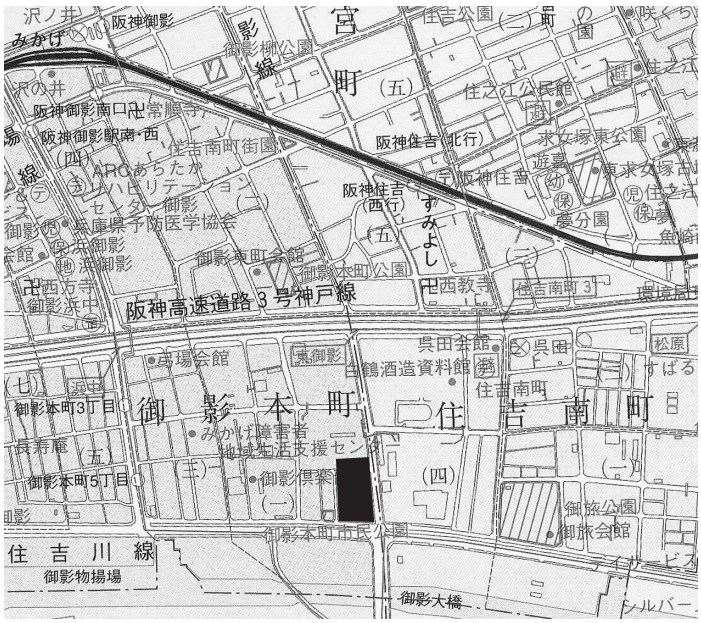
史料館副館長　道谷　卓

はじめに

来年（二〇一九年）のＮＨＫ大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」は、日本がはじめてオリンピックに参加した一九一二年のストックホルム大会から、一九六四年の東京大会開催までの五二年間を描く作品だ。その中でドラマ前半の主人公・金栗四三（かなくりしそう）の恩師として役所広司さんが演ずる人物が嘉納治五郎である。嘉納治五郎は、講道館柔道の創設者であり、「柔道の父」とも言われ、柔道を志す者であれば世界のどこに行っても通用する日本人と言っても過言でない。また、日本のオリンピック初参加に尽力し、近代日本のスポーツの礎を築いた人物として「日本の体育の父」とも呼ばれている。

この嘉納治五郎が、東灘区御影の出身で、この地域の近代教育の基礎を築いたことを知る人はそれほど多くない。そこで、本稿で、嘉納治五郎の生涯と東灘とのつながりを、特に教育の点を中心に述べてみたいと思う。

地図１　嘉納治五郎生誕の地（「阪神沿道地籍図（西部）」1920年発行より）
（地図１、２の黒塗りが浜東嘉納家の邸宅・千帆閣の場所）



地図２　「東灘区あんない」東灘区役所発行より

生活文化史№46④.indd　4　2018/05/21　8:27:38

一、御影生まれの嘉納治五郎

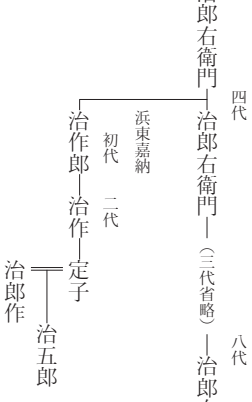
嘉納治五郎は、一八六〇（万治元）年十月二十八日、摂津国菟原郡御影村浜東（はまひがし）（兵庫県武庫郡御影町御影字浜東〈現在の神戸市東灘区御影本町一丁目〉）で、父・治郎作、母・定子の三男（第五子）として誕生する（地図1、2参照）。幼名を伸之助と言った。治五郎の生家、嘉納家は、浜東嘉納家と言い、酒造業や廻船業を営み、菊正宗で知られる本嘉納家とは縁戚関係にあった（系図参照）。

治五郎が育った浜東の家は御影の浜に面しており、屋敷から紀淡海峡を航行する帆船の帆影が青畳の上に映ったとことから「千帆一目」の邸宅と言われ、「千帆閣」とも称された（この邸宅は、祖父・治作が建てた）。そして、治五郎は、この浜東の邸宅で誕生から一〇歳までの幼少期を過ごすことになる。[1] 一八六三（文久三）年、治五郎が四歳の時、軍艦奉行の勝海舟による和田岬と西宮の砲台築造に父・治郎作が協力することになり、海舟は千帆閣を訪れ、幼い日の治五郎と出会っている。また、一八六五（慶応元）年、治五郎六歳の時には、摂海防備視察に来た老中・小笠原長行が千帆閣を訪れ、治五郎は、もみじのような手を行儀良く膝の上に置き老中に謁見したと言われている。

幼少期の治五郎は、父が仕事で多忙のためほとんど留守にしていたこともあって、家では、母・定子と過ごしていた。しかし、多忙な父であったが、治五郎の教育には熱心で、一八六六（慶応二）年七歳の時から儒者の山本竹雲に、習字と経書の素読を習わせた。このような教えを受け、治五郎は、八歳の時（一八六七年）に、字を拾い集めて二冊の小さな本を作り、その一冊を『天憙章』と名付けたが、これは、『大学』の天下の「天」と、「朱憙章句」の一部をあわせたものだという。

幼少期の御影時代、そのほとんどを母と生活していた治五郎は、のちに一九〇二（明治三十五）年頃の手記に「母ガ常ニ他人ノ為ニ自分ヲ忘レテ尽スコトデアル。誰ニカウシテ遣ルトカ彼ニカウシテ遣ラウトカ、誰ガ気ノ毒デアルトカ、ヨク心配シテ居ッタコトヲ覚エテ居ル」と母の思い出を書いており、他人のために尽くすことを母が教えてくれたと述懐している。この母の教えが、教育者として大成する治五郎の基礎を築いたことは言うまでもない。この母も治五郎が一〇歳の時、一八六九（明治二）年に病気で亡くなり、これを契機に治五郎は生地を離れ、父に連れられ東京での生活を送ることになる。

（系図）



二、嘉納治五郎の生涯

治五郎は、母の死去を契機に、父に連れられ居を東京に移したが、本節では、東京転居後の治五郎について、まとめておくことにする。[2] 東京に転居した治五郎は、育英義塾に入り英語やドイツ語を学び、東京帝国大学の前身・官立開成学校に入学したのち、同校が東京帝国大学と改称されたことで文学部に編入、一八八一（明治十四）年、治五郎二二歳の時、東京帝国大学文学部政治学・理財学を卒業（文学士）した。

治五郎は、育英義塾に通っていた頃から、自身の身体が虚弱だったことにコンプレックスを感じていたので、非力な者でも強者を負かすことの出来る柔術にあこがれを持ち、学びたいと思っていたが、父の反対にあったためうまくいかなかった。治五郎はあきらめきれず、一八

生活文化史№46④.indd　5　2018/05/21　8:27:38

歳の時（一八七七〈明治十〉年）、天神真揚流（平服で行う）福田八之助に入門し柔術を学ぶことになり、その後、起倒流（鎧着用で行う）の柔術を学ぶに至った。治五郎はこの柔術の二流派をもとに改良を重ね、東大卒業の年、「柔道」を確立した。そして、一八八二（明治十五）年、下谷北稲荷町一六（現・台東区東上野五丁目）の永昌寺に、「講道館」を創設したのであった。

治五郎は、講道館を拠点に、柔道を広めていくわけであるが、その理念となった言葉が彼によって考え出された「精力善用　自他共栄」である。「精力善用」は心身の持つすべての力を最大限に生かして、社会のために善い方向に用いると言う理念で、「自他共栄」は柔道を通して得た相手に対し敬い感謝することで信頼し合い助け合う心を育み自分だけでなく他人と共に栄えある世の中にしようという理念で、この二つは治五郎の進むべき道を示したものといえる。

また、治五郎は教育者としても顕著な功績を残している。講道館を創設した一八八二年に、学習院の講師となり政治学の教鞭をとったことが教育者としての第一歩であり、一八八六（明治十九）年には教頭に昇任している。その後、一八九一（明治二十四）年に文部省参事官兼第五高等中学校校長となり、単身熊本に赴任する。そして、一八九三（明治二十六）年には東京高等師範学校（後の東京教育大学、現在の筑波大学）の校長に就任し、治五郎は、同校の校長を三期計二三年余りの長きに渡って務めることになる。この間、治五郎は、中等教員養成のカリキュラムの策定に大きく関わり、そのモデルを構築していった。

さらに、治五郎は、「日本体育の父」と呼ばれるように、柔道をその基盤に置きながら、日本の近代スポーツにも多大なる貢献をしている。ところで、柔道が世界に知られるようになったのはどうしてか。それは、治五郎が熊本の五高校長のとき、ラフカディオ・ハーン、すなわち小泉八雲を英語教師として招聘したことがきっかけである。八雲は、治五郎の柔道に興味を持ち、そのことを著書『東の国から』（一八九五年、"Out of the East"）に書き記し、この本を通して欧米に柔道が紹介されたのであった。この柔道の世界進出は、治五郎を、世界の舞台へと送り出すきっかけを作っていく。それは、近代オリンピックの創設者・クーベルタン男爵からの要請で、一九〇九（明治四十二）年、東洋初の国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）の委員に就任するという形で実現する。そして、これを契機に、一九一二（大正元）年ストックホルムオリンピックに日本は初めて参加し、治五郎は日本選手団団長になった。その後、治五郎は、存命中に開催されたほとんどのオリンピック大会に臨席している。[3] この間、治五郎は、一九一一（明治四十四）年大日本体育協会を設立し、初代の会長に就任している。また、治五郎はＩＯＣ委員として精力を傾けたことが、オリンピックの東京開催であり、それは一九三六年（昭和十一）のＩＯＣ総会で、一九四〇年の東京オリンピック（戦争激化で中止）招致の成功へとつながるのであった。

このように、教育者、「柔道の父」、「日本体育の父」として活躍した治五郎であったが、一九三八（昭和十三）五月四日、カイロでのＩＯＣ総会からの帰国途上の氷川丸の船中で肺炎を発症して帰らぬ人となった（享年七九歳）。

三、嘉納治五郎と東灘とのかかわり

普段は東京に住まいを構える治五郎であったが、生まれ故郷の御影をはじめ東灘から神戸市全域に範囲を広げてみると、旅行や出張と称して、頻繁にこの地を訪れていることがわかる。[4] とりわけ、治五郎の本家筋にあたる菊正宗の本嘉納八代目・嘉納治郎右衛門は同世代であったことから、親交があつく、しばしば、御影の治郎右衛門の邸宅を訪れている。

実は、この治五郎の治郎右衛門宅への訪問がきっかけで、御影を文

生活文化史№46④.indd　6　2018/05/21　8:27:39

教の地へと発展させる基礎を築いた組織が考案されている。[5] それは、「御影教育義会」という組織で、一八九二（明治二十五）年三月二十七日に設立されている。治郎右衛門をはじめ地元の有志は、かねてから、御影町に教育を普及させるためにはどうすべきかを熟慮していた。同年二月二十六日に、文部省参事官であった治五郎が治郎右衛門を訪問した際に、治郎右衛門たちは治五郎を囲んで懇話会を開き、教育普及のためにどうすべきかを相談し、治五郎はその場で自らの教育理念を語り、普及のための組織を作るべきであると語った。これにより設立されたのが「御影教育義会」であり、いわば、この組織は、治五郎発案の組織であった。この会は、御影町教育の普及をはかることを目的とし、尋常小学校やそこに通う児童への援助を行い、町民には講演会を開催して教育の重要性を説いていった。この会が行ったことの中で特筆すべきは、治五郎の助言のもと、幼児教育の重要性にかんがみ幼稚園を設立したことである。これが、一八九二（明治二十五）年に開園した御影幼稚園で、開設当初は御影教育義会が運営した私立の幼稚園としてスタートし、五年後の一八九七（明治三十）年に町立に移管している。今、御影地域には、この御影幼稚園をはじめ、御影小学校、御影中学校、御影高校が半径三〇〇㍍の円内に立地し、「文教の地」を形成しているというその源流は、この御影教育義会にあると言えよう。

また、治五郎は、東灘に彼の教育理念を実現するための学校の設立に参画している。今や全国的にその名が知られている「灘中学校・灘高等学校」である。灘中学校は、灘五郷の酒造家である菊正宗の本嘉納家、白鶴の白嘉納家、桜正宗の山邑家の三家の篤志を受けて設立された。そのきっかけは、本嘉納の治郎右衛門が奉公人の人材育成を行いたいという思いと、治五郎が治郎右衛門へ語ったこれからの日本を支える人材を作る学校を作りたいという理想がマッチしたことである。さらに、桜正宗代表で元魚崎町長の山邑太三郎が、官公立学校の欠点を補い特色を有する私立学校の設置を熱望、魚崎町の町有地を校地として無償提供するよう町長に申し入れた。[6] こうした酒造家の思いと治五郎の教育への思いが開花し、灘中学校設立へと動いていった。治五郎は、一九二七（昭和二）年十月八日、御影で、両嘉納家や山邑家など関係者と灘中学校の設立にむけ協議をしている。そして、同年十月二十四日、旧制灘中学校の設立認可がおり、翌年四月からの開校が決まった。

初代校長には、治五郎が愛弟子の眞田範衛を招聘した。眞田は学校の「教育の方針」を定め、自ら校歌・生徒歌も作詞した。また、治五郎自身も学校の顧問となり、校是には自ら柔道の精神として唱えた「精力善用　自他共栄」を採り入れた。そして、一九二八（昭和三）年四月一日、旧制灘中学校が開校、治五郎は開校・入学式に参列している。その後、治五郎は、同校の入学式、卒業式には必ず列席している。

このほか、治五郎は、灘中学校はもとより、御影師範学校や魚崎小学校など、地元の学校などで柔道、教育、体育を題材に数多くの講演を実施している。

おわりに

嘉納治五郎を顕彰しようと、地元では、御影公会堂のリニューアル（二〇一七年四月）にあわせ、その地下に「嘉納治五郎記念コーナー」を設置した。治五郎関係の資料を展示するとともに、その中央には、柔道着姿の等身大の治五郎の銅像が置かれている（写真1）。また、灘中学校の校庭にも治五郎の紋付袴姿の銅像が立っている（写真2）。[7]

地元ではこれまで、嘉納治五郎について、それほど関心を示してこなかった。彼の生誕の地がどこかを知る人もほとんどいないであろう。来年の大河ドラマを契機に、嘉納治五郎という人物について、地元の人々が少しでも興味を示してくれることを期待したい。

生活文化史№46④.indd　7　2018/05/21　8:27:39

（註）

（1）幼少期・御影時代の治五郎については、『嘉納治五郎体系　第一三巻　年譜』（一九八八年、講道館監修）を参照した。

（2）本節における治五郎の系譜については、『気概と行動の教育者　嘉納治五郎』（二〇一一年、生誕一五〇周年記念出版委員会編、筑波大学出版会発行）を参照した。

（3）一九三二（昭和七）年のロサンゼルス五輪で、治五郎とともに、後に深江で深山医院を開業する深山杲が、日本水泳選手団のチームドクターとして随行していることは興味深い。

（4）治五郎の動静は、前掲（1）の『年譜』のほか、『講道館百三十年沿革史』（二〇一二年、講道館発行）付録のCD版に収録されている「年表編」から把握することができる。

（5）この組織の設立の経緯については、『武庫郡誌』（一九二一年、武庫郡教育会編）四七五頁以下を参照。

（6）灘中学校設立の経緯については、『魚崎町誌』（一九五七年、魚崎町誌編纂委員会）五七九頁以下を参照。

（7）なお、嘉納治五郎の銅像は、この東灘区内の二基を含め、国内に五基ある。残りの三基は、東京都の筑波大学附属小学校占春園と講道館、茨城県の筑波大学。

写真１　御影公会堂の嘉納治五郎記念コーナーに設置された嘉納治五郎の銅像

写真２　灘中学校・高等学校内・嘉納治五郎の銅像

生活文化史№46④.indd　8　2018/05/21　8:27:39

深江にあった戦争　1

深　江　塾

かつてこの深江の町には「あの戦争」の傷が深く刻まれた。昭和二十年（一九四五）には米軍のB29爆撃機を中心とした空襲が幾度もあった。当時武庫郡本庄村と呼ばれたこの地の海岸には海軍の軍需工場である川西航空機甲南工場があった。昭和二十年になってからはこの工場を目標とした大規模な空襲があり、深江の町の大部分が爆弾や焼夷弾によって破壊され焼けた。住む家だけでなく村人も多くがその犠牲になった。

当時、本庄村からは幾多の男子が戦地に出征した。終戦とともに村に帰ってきた人もいたが、大陸であるいは南の海で倒れ二度とふるさとに帰ることのなかった方も少なくない。

あの戦争からすでに七十年以上の歳月がたった。戦地に行った人、銃後で戦火に遭った人、戦中戦後の波乱の生活を体験した人もその多くが人生の黄昏のときを迎えている。すでに鬼籍に入られた方の方が多いといえるかもしれない。昭和十年代から二十年代における生活は、戦争抜きには語れない。「老兵は死なず。ただ消え行くのみ」というD・マッカーサーの言葉が有名だが、高齢化した当時を知る方々の記憶や体験談を残し後世に伝えることは有意義なことだと信じる。

本文は、平成二十八年秋から座談会形式で各自に話してもらい深江塾が整理したものが基になっている。正確を期するために、深江塾で同じ話や言葉などを複数の方々に再度個別に聞き取りを行った。

（文責・森口健一、修正・大国正美）

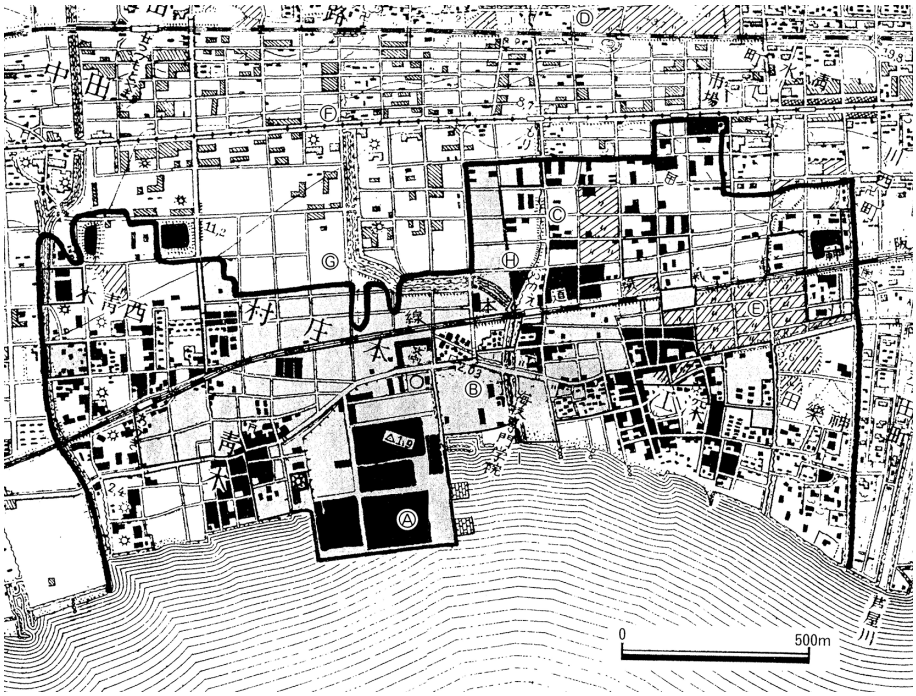


図　深江地区の空襲被害地図（『本庄村史』地理編・民俗編より）網掛け部分が空襲罹災地、斜線は耕地。
A　川西航空機甲南製作所　　B　旧神戸高等商船学校（現・神戸大学）

生活文化史№46④.indd　9　2018/05/21　8:27:39

第1話　「この仇はとってやる」

甦る記憶

東京墨田区、両国国技館の側に江戸東京博物館がある。地下一階、地上七階建ての大きな博物館である。江戸時代から現代の東京までの東京都の人々の生活文化の移り変わりを模型と音響で体感できるようになっている。

平成十四年二月、藤本吉江は友人二人とともにこの博物館を訪れた。日本橋の模型の橋を渡り江戸時代を過ぎ現代東京のコーナーにやってきた。「東京大空襲と復興」の展示室である。昭和二十年三月十日の米軍B29による大空襲と復興の記録の展示場である。ドアの入り口に立ったとき、「ブォーォーン」と展示室全体に響く爆音が聞こえた。その爆音を聞いた途端、彼女はその場から前に進むことができなくなった。彼女は友人二人に別れを告げてその博物館から立ち去った。

展示館に充満する爆音が吉江に昭和二十年五月十一日の神戸大空襲の記憶を思い起こさせたのである。あの日に聞いた爆音の体験からすでに半世紀以上が過ぎていた。空襲体験は子や孫にも話したこともあった。請われて若い人に話したこともある。

しかし、その日聞いた爆音を耳にしたとき藤本吉江は半世紀前のあの日の子供に引き戻されていた。

空襲警報

昭和二十年五月、山本（現姓・藤本）吉江は十歳、武庫郡本庄村の本庄国民学校の四年生であった。家族は七人。父、母と四歳年上で魚崎の女学校（現・夙川学院）二年生の姉、六歳年下で当時四歳の妹の五人で深江の村を南北に通る札場通に面した一軒家に住んでいた。兄二人のうち、上の兄は予科練で西宮の上ヶ原方面にいた。下の兄も志願して軍の幼年学校に入っていた。

本庄国民学校では四月から縁故疎開と集団疎開が始まっていた。吉江も祖母の実家がある大阪の池田方面へ祖母と従姉妹とともに疎開する予定であった。学校では周りの友達が疎開でいなくなる中で、彼女たちも深江を離れなければならない日は明日か明後日かと思っていた。

吉江の家の道を隔てた西向かいに「山八」という八百屋店があった。その店のラジオから「中部軍管区、敵機…機編隊が紀伊水道方面から神戸阪神方面に向って北上中」との警戒警報が聞かれた。彼女は警戒警報のサイレンは覚えていない。警戒警報のサイレンの音は、今日の緊急車両のサイレンやあるいは高校野球の試合時に鳴るサイレンに似ている。ウーンと長く音の尾を引くような音である。

店のラジオで警戒警報を聞いてまもなく空襲警報のサイレンが鳴った。その音は、やや間延びした警戒警報のサイレンとは違っている。三ないし四秒間隔の連続音である。ウーンのンが消えないうちに次の「ウゥ」がなり始める。その連続音はいかにもせきたてられるような音である（筆者注：これらサイレンの音については二〇一五年八月十五日NHKラジオの深夜放送「録音盤は語る」で昭和二十年二月四日当時のサイレンの音を聞くことができた。体験談によるサイレンの音をこの録音放送で確認した）。

サイレンは深江では本庄国民学校の南にある本庄役場から発せられるようであった。警報が出たときには、隣保の役員をしている父は近所の人々が空襲に備えるべくゲートルを巻き、メガホンを持って伝達のために外に出て不在であった。五月十一日は金曜日で平日でもあり各家にいるのは年寄りや女性がほとんどだったので、父は警戒を呼びかけに廻っていたのである。

姉は四月になってからはほとんど学校に行くことはなかった。昭和二十年の年が明けてからは単機あるいは数機の爆撃機が度々神戸方面にやってきていた。三月には神戸の西半分が大空襲にみまわれて壊滅

生活文化史№46④.indd　10　2018/05/21　8:27:39

状態になっていた。女学校は遠方からも通う生徒もあり警戒警報が発令されてから帰宅ということもできず、自宅待機となっていたのである。吉江も本庄国民学校の生徒の多くが疎開して児童も少なくなりその日は自宅待機であった。

被災して

空襲警報のサイレンが聞こえたので吉江は母、姉、妹の三人と共に自宅の一角、寝室に使っていた和室の床下に掘った防空壕に入った。防空壕は深さ約一㍍のただの穴というような代物である。広さは一畳半ほどである。軍隊の野戦において兵士が掘る「蛸壺」の少し広い穴でしかない。

兵士が野戦において掘る塹壕・蛸壺は兵士一人が入れるほどの穴である。銃弾が飛んでくるときは頭を下げてその穴に頭を隠す。空襲のときも同様である。爆弾が落ちたとき、人馬を殺傷する破片は爆発地点からやや上方に向って飛び散る。塹壕に兵士が入るのはその破片による殺傷から免れるためである。よく映画で爆発や銃撃の場面で人が地面に伏せるのはそういうことをあらわしている（筆者注：戦地でいくたびかの戦いを経験した筆者の父から幾度か聞かされた体験談による）。

彼女には壕に入れば、どのように安心かとか安全かという具体的なことは判らなかった。漠然と爆弾は怖いということしかイメージできない。ただ空襲警報があれば直ちに壕に入るという日頃からの訓練で体がそう動いた。

「ブォーォーン」という爆音が聞こえる。聞いたことのない周りの空気全体が震えるような音である。その爆音が町全体に覆いかぶさるような不気味さと恐怖を住民たちに感じさせた。彼女は蓋のない壕の中でその爆音を聞いていた。地震のようなゆれと地響きが伝わってきた。吉江たちは両方の目と耳を両手の指で押さえた。そうしなければ爆風で目が飛び出し、耳が潰れると聞いていたから。爆音と爆発音が入り混じる。近くに爆弾が落ちたのであろうか。

バタン、ドタンいう音が聞こえた。家中のフスマや戸が爆風で倒れている音である。ドタンという音は仏壇が倒れる音であった。家中の物が勝手に動き倒れ壊れた。

地響きがするたびに吉江は無意識のうちに「お母ちゃん、死んだらアカン」と叫んでいた。それは母に向って叫んでいるだけでなく妹や姉にも向って叫んでいたのである。「死んだらアカン」という叫びは、母や家族への思いもあったかもしれない。あるいは、体の奥底から突き抜けるような恐怖からくる悲鳴とも言うべきものであったかもしれない。

彼女にとって空襲の時間は長かったのか短かったのか思い出せない。ただ早く恐怖から開放されたいという思いだけであった。ちょうど平成七年の阪神・淡路大震災のときに感じた時間感覚であるといえば、それに近いかもしれない。地震の揺れは秒単位であったけれど、ずいぶんと長くゆれていた気もする。そんな感覚であった。記録では約十分間の爆撃であった。

藤本吉江には納多ヒデという母方の叔母がいた。納多ヒデは祖母の納多リウやいとこたち三人と一緒に暮らしていた。叔母の家は藤本の家から札場通を西に渡って数十㍍離れたところに住んでいた。いとこは十一歳の女の子、十歳、七歳の男の子の三人である。

十一日の午前、空襲警報がなると同時に叔母はすぐに行動を起こし、共同壕に避難したのである。共同壕は、叔母の家から南東の海岸に近い場所にあった。共同壕は隣保の人たちの共同作業によって作られた比較的丈夫な壕であった。叔母の家には男手がなく壕を作る作業には参加することができなかった。叔母は、そのことをずっと近所に対し負い目を感じていたようであったと吉江は述懐する。

生活文化史№46④.indd　11　2018/05/21　8:27:39

叔母は一番幼いいとこをかばいながら3人をつれて壕に向かった。壕のそばまで来たとき叔母は、いとこたちに言った。「さあ、ここに入れてもらいなさい。おばあさんを迎えに行って後から一緒に来るから」と。共同作業に参加できなかった負い目がその壕に入れなかったのであろう。これが、いとこたちが自分たちの母の姿を見た最後であった。いとこたちが壕に入ったとき、すでにその真上の空にはB29の姿があった。

娘たち三人を残して祖母を迎えに行こうと上空を見上げたとき、近くで爆弾が破裂した。二五〇㌔爆弾である。川西航空機甲南工場を破壊するための炸裂弾である。地上で破裂すれば地面には直径数㍍の穴ができるといわれる代物である。

写真１　阪神電車北側に残った爆弾の跡

猛烈な爆風は、子どもたちが入っている壕の入り口のそばまで叔母の体を吹き飛ばした。炸裂弾は強烈な爆風を伴い、同時に破片を回りに吹き飛ばす。その破片が周囲の人馬を殺傷する。破片の切り口は日本刀で一刀のもとに切ったような断面となる。その破片は叔母を吹き飛ばすと同時に、その顔面をまるでスイカを半分に切るように切り裂いた。

爆発がおさまった時、恐る恐るいとこは外を見た。人が倒れている。手足がかすかに動いているようにも見えた。周りの大人がすぐに子どもたちを制して見ないようにした。子どもたちは倒れている人がまさか自分たちの母だとは夢にも思わなかった。

壕の周囲が大人たちの手によって、なんとなく片付けられたあと、いとこたち三人は藤本吉江の家にやってきた。三人は泣きながら「お母ちゃんとおばあちゃんがいない」と言った。それを聞くなり吉江の父は叔母の家に向って走った。

家の裏口から東に、いとこたちが入っていた壕の方向に向って十㍍ばかりの路地がある。路地の入り口を入ろうとしたときおばあさんが倒れているのを見た。祖母である。地面には血が流れている。父が駆け寄った。叔母の腹部からは腸がはみ出している。生きているとは思えないが、父はおばあさんの腹からはみ出した腸を手でもう一度中に戻そうとした。生きかえるはずもない甲斐のない行為であった。しかしそうでもしなければ何をしてよいのかどうすればよいのか彼にはわからなかった。ただ、もう一度、普通の姿に戻したかったのだ。

どこで手に入れてきたのか、誰が作ったかは分からなかったが、二つの棺桶が並べられた。藤本の家から大八車に棺桶を乗せて本庄国民学校へ運んだ。学校の東門を入ったすぐに東校舎があり、そこに吉江が学んでいたロ組の教室があった。二つのひつぎはその教室に安置された。

翌日、国民学校のすぐ北の阪神電車の線路を渡ったところの本庄墓

生活文化史№46④.indd　12　2018/05/21　8:27:39

地に行った。少しの空き地で二人の遺体は焼かれた。寄せ集めの木材のせいか遺体はなかなか焼けなかった。まるで子どもたちを残して彼岸に行くことを拒んでいるようであった。まわりで嗚咽が上がる中で、吉江は思わず声を上げた。

「この仇はとってやるからな」。

第2話「深江に戻ってみれば」

授業を切り上げて

昭和二十年五月十一日朝、寺田（現姓・北村）光子（当時十四歳）はいつものように阪神電車で深江駅から住吉駅に向った。住吉にある青年学校に行くためである。

写真２　被災した本庄国民学校

午前中の授業の最中に空襲警報があった。事前に警戒警報はなく、いきなり警報が鳴った。光子たちはクラスの仲間と共に校庭にある防空壕に駆け込んだ。その壕には十人ほどが避難できる広さがあった。壕とはいうものの民間人によって掘られたもので、入り口は戸板でしかないが、ともかく壕に入るということはひとまず安全という気持ちにはなれた。

昭和二十年になってからは、数日おきに神戸の南のほうからB29が単機あるいは数機でやってくるようになっていた。神戸の西のほうはすでに大規模な空襲で大きな被害を受けていたことは聞いていた。空襲による爆弾の怖さは実際には体験していないけれど、相当ひどいものであることは想像できた。

光子は壕の中で爆音を聞きながら「今日はいつもと違うのではないか」と思った。爆音が単純な音ではなく空一面に広がるような音が徐々に近づいてくる。爆発音が聞こえる。遠くで聞こえていたその音がだんだんと近づく。突然、地響きと共に爆発がおきた。校庭に爆弾が落ちたのだ。光子たちの入っている壕の側にバサ、バサと木の枝が落ちてくる。爆弾の破片が校庭の端にあった桜の木の枝を切り裂き、爆風がその枝を吹き飛ばしていたのだ。

空襲警報が解除になって光子らは壕から出た。壕の側には人の腕ほどもある桜の枝が転がっていた。強風でちぎれたものではなく鋭い刃物で一気に切り裂かれたものであることが判った。もしその破片が人間に当たっていたらどうなっていたかを思ってまるで自分の身が切り裂かれた気がした。

教員の指示によって授業は中止となり帰宅することとなった。徒歩で我が家に向かう光子は学校からいったん南に下り、阪神住吉駅付近まできたが、電車が動いている様子がない。電車沿いの道を東へ、深江方面に向って歩き始めた。深江の自宅まで歩いても一時間ほどであ

生活文化史№46④.indd　13　2018/05/21　8:27:40

る。毎日見慣れた電車沿いの町があちこちで潰れている。火災が起きていないのが幸いである。

住吉川を越えたところで、行く手になにやら叫びながら歩いている女性が見えた。近づくにつれて女性の様子がはっきりとしてくる。素足である。衣服のあちこちが破れている。破れた服のあちこちに黒いしみのようになった血が付いている。全身を土ぼこりが被ったような、また粉をまぶしたような髪の毛がその顔をばさりと覆っている。頭の傷から流れた血が髪の毛についていく筋かの毛が顔に張り付いている。魂が抜けたようなというのはこのような様子を言うのであろうか。何かに押されるようにあるいは何かに引かれるように歩いている。突然「…ちゃん」「…」と叫ぶ。光子はその叫びを聞いて胸つかれる思いがした。「この人はわが子の名を呼んでいるのだ」「この人の子供がいないのだ」「死んだのであろうか」、さまざまな思いが胸をよぎる。それ以上、その女性に近づくことができず、うつむいてその女性が視野に入らないように通り過ぎた。後ろで「…ちゃん」と呼ぶ声が聞こえる。いつまでもその声が耳に残った。

血に染まる老木

青木の駅の北を過ぎた。駅を過ぎた東側の深江駅寄りに電車が止まっている。だれも乗っていない。電車を右手に見てさらに深江の方に歩く。電車沿いの北側にある近隣の村の共同墓地が見えてきた。墓地は西が旧青木村、中央が旧小路村、道を挟んで東側が旧深江村の地区とおおむね区割りされている。西地区の青木の墓地と、東の深江墓地にはいつ、誰が植えたのかその由来がわからないクスノキの老木が一本ずつあり、年中緑の葉を繁らせていた。墓地に近づくにつれ、クスノキの葉の色が変色しているのが分かった。黒ずんでいる。枝には衣服の切れ端がぶら下がっている。木のそばまで来たとき、葉が黒ずんでいるのは血しぶきで葉っぱが染められたとわかった。

後で聞いたことであるが、墓石の陰に避難していたのであろうか、至近弾をあびたのであろう人が、吹き飛ばされその体もバラバラになってクスノキの枝にその手足がぶら下がっていたという。ちぎれた手足から流れ出た血がクスノキの緑の葉を赤く染めたのだ。時間がたって血潮の色が黒く変色したのである。

墓地を抜けようとして線路のほうを見た。馬が倒れている。手足もあるし頭もある。血が流れている様子もない。けれど仰向けになったまま動かない。恐る恐る少し近づく。馬の体には目立った傷はないけれどその腹は異常に膨らんでいる。パンパンに張り詰めている。顔を見る。カッと目が開かれている。

「馬は仕事をしていたのだろうか」「壕に入ることもできず外に置かれたまま空襲に出くわしたのだろうか」と光子は考えた。さらにただひたすら働き続け、空襲という人間がもたらす災難に避難することもできず、無残な姿をさらしているもの言わぬ馬が哀れであった。

倒れ横たわった馬の向こうに母校の本庄国民学校の校舎が見える。

この校舎は、昭和十二年に新築された鉄筋コンクリート建ての本庄村自慢の校舎である。竣工したときには新聞でも「白亜の校舎」として紹介された。海岸近くの本庄村が昭和九年の室戸台風の強風と高潮による被害を受けた教訓をもとに新築されたものである。

村人にも児童たちにも自慢の白亜の校舎が、爆弾の直撃や至近弾のため焼けただれている。窓という窓は皆そのガラスが吹き飛んでいる。校舎も全身が傷ついているのだ。何年もここで学び遊び思い出をいっぱい作ってくれた、思い出の詰まった母校がやけどを負い傷だらけになっている。光子はじっと立って校舎を見つめた。

校舎のテッペンには、新築当時の岩谷省三校長が「本庄で学ぶ児童の教育の指針」として建てた「五輪の塔」があった。爆風にもめげず空に向って立っている二本の塔を見たとき涙が止まらなくなっていた。

生活文化史№46④.indd　14　2018/05/21　8:27:40

青木から深江に近づくにつれて、空襲の被害は目立ってきた。

昭和二十年当時、深江の町は阪神電車より北には田畑が広がる田園風であった。集落は電車道より南に向って海岸の方に集中していた。深江の駅に近づくにつれそれらの住宅が破壊されているのが目に付くようになった。

札場通という深江の南北の通りと旧国道・新道が交わる近くまで来た。我が家はもうそこである。付近の被害の状況をみるにつけ自分の家がどうなっているか気がかりであった。

知人に会った。「○○さん、うちの家どうなっているか知りませんか」と聞けば「あんたとこは大丈夫やったみたいよ」と教えてくれた。その人は「浜のほうに爆弾がいっぱい落ちた。谷さんの家は全滅や」という。

その人はさらに、話を続けた。谷さんとは谷角三氏のことで、当時深江の主力産業であった鰯の加工場の経営者の一人であった。加工場は「イリヤ」と呼ばれていた。イリヤには浜で採れた鰯を大釜で煮るためのカマドがある。カマドは加工場の屋内にあり、床をおよそ一㍍掘り下げた深さがあった。掘り下げた周りをモルタルとレンガで固めた壁がある。釜を乗せる部分以外もモルタルで固めてある。少し無理をすれば焚口を入り口として数人が入れるほどの広さがあった。

その日、空襲警報がなったとき家族は皆その壕に入った。ただ主人の谷氏と長男は所用で家にはいなかった。三十歳の谷氏の夫人と、十五歳の長女、四歳の次女の家族。たまたま谷さん宅に来ていた叔母さんの女ばかり四人がカマドの壕に避難した。

壕の入り口に爆弾が落ちた。

写真３　ガラスは吹き飛び焼けただれた「白亜の校舎」

写真４　本庄国民学校の西側辺りは焼け野原だった

生活文化史№46④.indd　15　2018/05/21　8:27:40

ほぼ直撃弾である。空襲が終わった後、近所の人たちが崩れたカマドの壕を掘って助け出そうとした。爆弾が間近で破裂した割には壕そのものは大きな損傷はないようであった。掘り下げた構造がよかったのかもしれない。

しかし、爆風は入り口からフイゴの風のように猛烈な勢いで壕の中に吹き込んだ。谷さんの奥さんは内臓が飛び出ていた。長女のさよさんはほっそりした女の子であったが、風船を膨らませたように体全体が膨らんでいた。四歳の次女は、顔は別段傷も付いていないようであったが、頭の後半分が鋭利な刃物で切り取ったようになくなっていた。叔母さんは右の耳が消えていた。

我が家に帰り着く

谷さんの壕から光子の家は大きな声で呼べば聞こえるほどの近さである。「自分の家や家族は無事であろうか」と駆け出した。家が見えてくる。朝、青年学校に行くときに出たままの家が見える。住吉の学校から深江の我が家にたどり着くまでに見てきた風景、瓦礫となった家々を見てきた彼女の目にはいつものように、当たり前のように、そこにある我が家がなぜか懐かしくいとおしく思えた。

飛び込むように家に入ると母と祖母は無事であった。二人の無事を確認すると彼女は浜に駆け出した。浜辺に着くとちょうど父の寺田豊吉が船から降りてきたところであった。

父は朝早くから漁に出ていたのである。船には船頭である豊吉と岡山の日生から出稼ぎに来ている三十歳の男性が乗り組んでいた。

朝早くからの漁を終えて深江の浜に帰ろうとしたとき、南のほうから船を追いかけるように上空を幾つかのかたまりになったB29爆撃機がやってきた。

豊吉は上空を見ながら「今日はいつもとちがう」と感じていた。「神戸の西がやられた」と聞いていたが「今日は深江の川西航空がやられる」と思った。

あっという間にB29の編隊が上空にやってきた。空から見れば小さな漁船である。「まさかこの船をめがけて爆弾を落とすことはなかろう」と思いながらも豊吉は船をジグザグに操りながら浜を目指した。

沖からは深江の空いっぱいにひろがった米軍機が、次々とその機体の腹から爆弾を投下するのであろう。今にも自分の船にも爆弾が落ちてきそうな気がする。ゆく手の海の落ちた爆弾は十㍍以上もあろうかと思われる水柱を立てる。陸ではオレンジ色の光が閃くと次にはドンという音がする。自分の家の近くにも爆弾が落ちているようであった。しかし沖に出て毎日のように漁場で見立てをしている豊吉は沖合からみて自分の家に直撃弾はないと確信していた。それでも青年学校に行っている娘の光子のことが気になった。

空を覆っていた米軍機は六甲山に沿うように機首を北東のほうへむけて去っていった。豊吉はあれほどの爆弾が落とされたのに深江の集落に大きな火災が起きていないのに不思議な思いを抱きながら、船を深江の自宅前の浜辺に着けた。

ここ数日にはない大漁とも言える漁であった。底引き網を入れた漁でカレイが船のイケスにあふれていた。

船を浜につけると同時に娘の光子がやってきた。駆けつけてきた娘を抱きながら父は聞いた。「家は大丈夫か」「お母ちゃん、おばあちゃんは大丈夫か」と聞いた。光子は住吉の学校から父の船のそばまでやってくる数時間に見聞きしたことが恐怖心と共に甦ってきた。

声にはならなかった。ただ涙がポロポロと落ちるばかりであった。

◇

第一話は、藤本吉江氏（昭和十年深江生まれ）、第二話は北村光子氏（昭和六年深江生まれ）の体験談をもとに森口健一が作成、飯田一雄、松下芳子、増田行雄の意見をもとに大国正美が修正を加えた。

生活文化史№46④.indd　16　2018/05/21　8:27:40

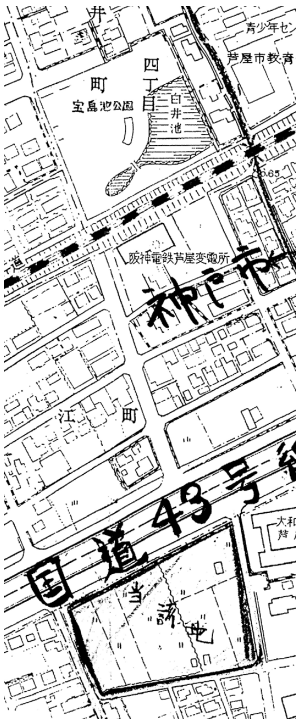
深江物語（8）

唱歌「春の小川」「故郷」を思わせる風景

深江塾　森口健一

昭和三十年代初めの頃まで、神楽町（現在の深江南町一丁目）の北端の一角に唱歌の「春の小川」を思わせる水路があった。現在の深江南町一丁目の北端が国道43号に接する面積九五四三平方㍍の田畑の中と、その周囲を流れる二つの水路である。国道43号は当時旧国道あるいは新道と呼ばれていた。敷地は、西は津知川に接し、東と南はそれぞれ地域の生活道路に面し、西半分が水田で東半分が畑であった。

水路の一つは概ね水田と畑を二分するように敷地の中央を南北に流れ、もう一つは、畑の東端を北から南に流れ、敷地の南東角で西に向かい中央を流れる水路とひとつになって、田畑全体の西南角で津知川に合流する。



図

これら水路の源は阪神電車線路の北にある当時「皿池（さらいけ）」と呼ばれたため池である。明治九年（一八七六）の「深江村地籍図」（神戸市立博物館蔵）では「溜池　九反四畝拾八歩」とある。そのためか、これらの水路は一年中涸れることはなかった。皿池から流れ出た水は、阪神電車の線路と国道を潜って神楽町の田畑の灌漑用水路となる。津知川に合流するまでの水路の幅は二㍍から三㍍。水深は三十㌢から五十㌢。底は大人の足首が入るほどの泥で、泥の底は砂地である。流れは大雨のとき以外は穏やかで、めだかの群れがゆっくりと流れに逆らって泳いでも流されることはない。水路の岸は全て土で固められている。岸は大人一人が歩けるほどの幅がある。いわゆる「あぜ道」

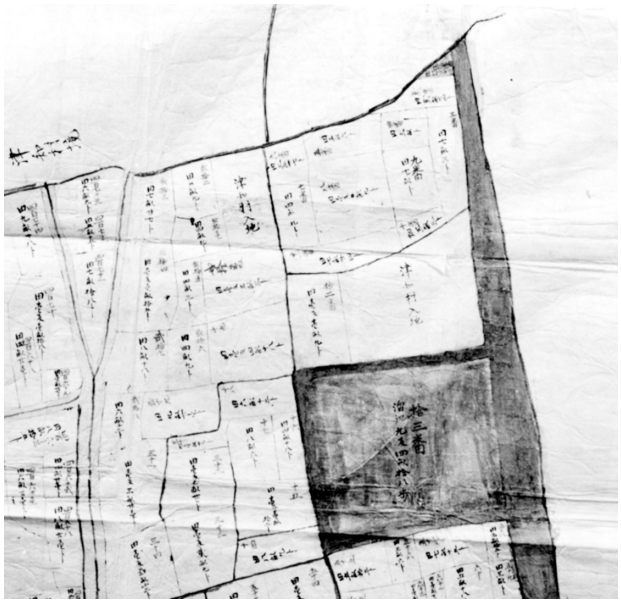


写真１　明治９年の地積図に描かれた皿池
「溜池」とだけ記載（神戸市立博物館蔵）

生活文化史№46④.indd　17　2018/05/21　8:27:40

である。中央の水路の中ほど、敷地全体の真中あたりに田畑作業用の道具を入れる小屋のような造作物があった（表紙写真）。

当時これらの水路は初夏から秋口にかけては、子どもたちの格好の遊び場であった。水田に水が張られ稲が植えられた頃、子どもたちは「川へ行こう」と連れ立って魚取り用の網と、アルミ製洗面器や小さなバケツを持って「川」へ向かう。言うまでもなく「川」とは水路のことである。「川」にはありとあらゆる水にすむ生き物がいた。水路の延長が二つを合わせても二〇〇㍍ばかりしかないので、種類は豊富でも数は少なかった。メダカ、ハゼ、フナ、ナマズ、ドジョウなどの魚たち。いずれの魚たちも一〇㌢を越えるものはいなかった。ゲンゴロウ、ミズスマシ、ミズカマキリ、さまざまなトンボの幼虫のヤゴ。そして水の中に入る子供の足に吸い付いて血を吸う嫌われ者のヒル。ヒルにくっつかれてあわてて土手に上がると、トカゲ、カエル、ヘビがいた。西の水田の上にはギンヤンマが稲の緑の上を行ったりきたりしている。東の畑の上にはモンシロチョウなどの小型のチョウが飛び交っている。

また現在の深江北町二丁目を南北に通って阪神電車線路敷までの道を栄通という。栄通に沿って南北に流れる名前のついていない幅一㍍ばかりの水路があった。旧森市場の西の道を南に下り北から旧栄通一丁目～四丁目の道路沿いの東側にあった。ここにザリガニが生息していた。昭和三十年代、深江の水辺でザリガニがいた唯一の場所であったという。

都市化が進み、現在の深江にあった田や畑が公営住宅をはじめ多くの住宅のために宅地化された中で、ここの一角は最後まで子どもたちにとっての自然の宝庫であった。

高層の市営住宅

子どもたちにとっての自然の宝庫であった「川」のある田畑は、昭和四十年代に入るとその姿を消した。この土地は、永らく敷地の東隣に住む岡田氏の所有地であった。岡田氏はこれらの敷地の田畑を小作に出していた。昭和四十七年三月、所有者は伊藤忠商事株式会社に変わり、昭和五十年一月には神戸市に所有権が移った。神戸市は同年十二月に、市営住宅の建築を開始、昭和五十二年十一月完成、「深江南住宅」と名付けられた。

当該住宅について神戸市のパンフレットには、「当住宅は、国道43号線の南側に面しており、その騒音対策として14階建棟を国道に並行させて南側８階建棟の防音壁とした」「当住宅は、現在の地方自治体が住宅建設にあたってかかえている問題点（自動車騒音、風害、プライバシー、電波障害等）が集中しているが、いずれにも細心の注意を払ったモデル団地として、昭和53年7月建設大臣表彰を受けた」と記載している。

およそ九五四三平方㍍の敷

深江南住宅　東灘・10

所在地	東灘区深江南町1丁目
敷地面積	9,543.00㎡
戸数	275戸　階数8、14
工期	50.12～52.11
建ぺイ率	19%
容積率	196%

当住宅は、国道43号線の南側に面しており、その騒音対策として、14階建棟を国道に並行させて南側８階建棟の防音壁とした。一方、14階建棟の住戸内への騒音進入を防ぐため、玄関のフラッシュドア、防音扉付の換気扇、ＤＫの二重サッシ、ガス燃焼用空気取入口の消音器取付等様々な対策を講じている。

また、高層による周辺民家への風の影響が予想されたため、妻壁コーナーを丸面とし、防風ネットを設置している。

このように、当住宅は、現在地方自治体が住宅建設にあたってかかえている問題点（自動車騒音、風害、プライバシー、電波障害等）が集中しているが、いずれにも細心の注意を払ったモデル団地として、昭和53年７月建設大臣表彰を受けた。

写真２　市営深江南住宅のパンフレット

生活文化史№46④.indd　18　2018/05/21　8:27:40

地に対し、住宅戸数は二七五戸である。高層住宅化したため建ぺい率は一九％、容積率は一九六％で敷地には結構な空間ができた。二つの建物の間にできた広場では、平成十年頃まではさまざまな行事、特に夏休みには毎朝ラジオ体操が行われていた。深江には深江本町や北町に市営、県営の住宅が多く建てられたが、エレベーターつきのこのような高層住宅は初めてであった。

昨今、この公営住宅の改修の話がちらほらと聞かれる。筆者の個人的な意見ではあるが、容積率を考慮しながらも残された空間を利用して「緊急避難および緊急用物資保管のための公共構築物」を検討してほしいものである。ついこの間までは地震や津波対策のことが緊急事態対策であったが、今日では空からの危機も考慮に入れる必要がある。このことは何も特異なことではなく、スイス連邦では「民間防衛」という名のもとにそのような対策がとられている。深江南地区には公営の住宅はここしかなく、昨今の情勢を鑑みるとき、この高層住宅を地域の安全という観点から大胆な政策を望みたい。

写真３　市営深江南住宅予定地（南側から）

写真４　市営深江南住宅予定地（西側から）

写真５　市営深江南住宅予定地（北側から）

「川」の源の池

「春の小川」を思い出させる水路の源は、阪神電車線路北側、芦屋市に近いところにある池である。いま、「宝島池公園」となっている。

生活文化史№46④.indd　19　2018/05/21　8:27:41

この池は、名前が時代と共に変わっている。

戦前から深江に住む人は今でも「皿池」という。昭和五十五年ごろに岡田龍太郎氏が作成した手書き地図では「皿池」と表示されている。

昭和四十二年に発行された地図では「白井池」となっている。また図1の地図では敷地の東半分が「白井池」で、西半分は埋め立てられ「宝島池公園」となっている。平成二十七年の神戸市建設局の台帳には公園名「宝島池公園」と表示されカタカナでは「ホウトウイケ」となっている（写真6）。

この池の面積や所有権の変化を調べてみた。

昭和二十二年一月の「深江区有財産目録」（深江財産区文書）には地目「溜池」、字名「永井町四丁目三」、面積「九反一畝」、付記として「下池水面堤防共」と記載されている。所有者については、昭和三十五年一月に所有者「神戸市東灘区本庄町深江」の名で所有権保存登記がなされ、同日付で所有権は神戸市に移転された。移転原因は「買収」によるものである。面積は六一五三平方㍍である。要するに古くから深江村の溜池であった「皿池」は深江地区の田畑を潤していたが、戦後になって住宅地となって田畑がなくなり、昭和三十五年には溜池としての役割を終えて公園になって現在に到っているということである。皿池が溜池として地域に水を供給している頃が、先に述べた深江南地域に流れる「春の小川」の景色を提供していた頃である。皿池からの灌漑用水路の幅は一㍍にも満たず深さも三〇㌢くらいであった。

皿池の南西角に水門があった。一年か二年ごとにこの水門が開かれる。池の水面は大きく下がり池の面積は半分近くになる。地域の人は「池さらい」といっていた。このときには流れ出る水とともに多くの魚や生き物たちも池に接続する小川に流れ出た。

子どもたちが「春の小川」でメダカやフナやドジョウを取っていたのは、皿池から流れ出たものが小川や水路に住み着いたものである。「池さらい」の時には、普段入れない池の中央部まで入って子どもたちは泥に足をとられながら網で多くのフナを取った。少し大きな子どもならバケツ半分くらいのフナを取ることができた。筆者の同級生の話では、取ったフナを知人の家に届けて大いに喜ばれたという。残念ながらそのフナの料理方法までは聞かなかったらしい。

昭和三十年代初め当時の本庄小学校低学年の児童は、初夏には理科の授業の一環として教師に率いられて皿池の周りにやってきた。

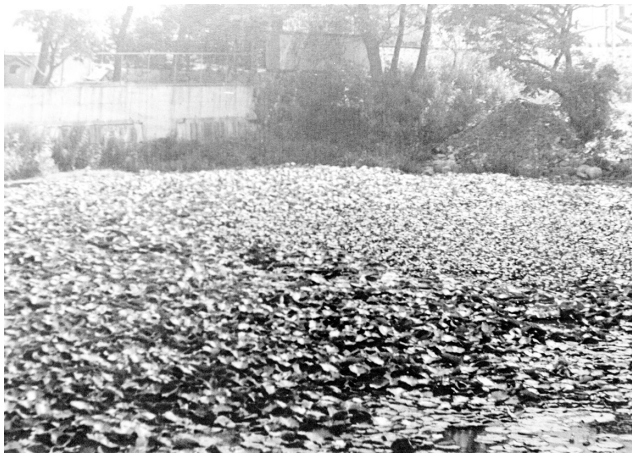


写真6　1960年ごろの「皿池」

しかし池が神戸市に買収され公園として整備される頃には、残っていた田畑にはパラチオンというような殺虫剤が散布された。田畑には赤い布をつけた竹竿が立てられ田に入らないように警告されていた。このため田、水路、小川からあっという間に生き物たちは消えた。深江の海岸や砂防堤の周りには、タツノオトシゴが揺らめいているほどの水質であったが、水路から流れた汚染水は、浜辺に生活していた生き物も消滅させた。

今日では本庄小学校の理科での授業で、水辺の生き物を知るために

生活文化史№46④.indd　20　2018/05/21　8:27:41

電車に乗って住吉川まで行っている。

「栄通」と「すずらん通り」

深江には南北の通りには名前がついていた。深江駅の東側を通る道を稲荷筋、その東の道が札場通、その東が栄通、一番東の道が繁昌通である。地元では稲荷筋を、阪神深江駅より南の一部だけであるが「深江銀座通り」と呼んだ。同様に栄通は別名を「すずらん通り」といった。

この「すずらん通り」について、主に二人の方から聞き取りを行った。一人は昭和二十年生まれで栄通一丁目に成人するまで住んでいた田中平八氏。もう一方は、昭和三十年代半ばに栄通で開業された児島医院の児島哲郎博士である。

「すずらん通り」の名前は、阪神電車道から北に向かって森市場までの栄通の道の両側に「すずらんの花の形」をした街灯が並んでいたことに由来する。道の西側には昭和三十年代の終わり頃まで幾つかの店が並んでいた。貸し本屋・野本呉服店・米穀店・ふとん店・洋服店などである。

通りの東側には国道2号に近いところから順に、芦屋綿業・福原産業貿易があり、阪神電車踏切を南に行くと兵庫伸鉄工業・共同油脂神戸工場。西側には2号に近くに関西自動車という工場があった。この会社は主にトラックの車体を支えるシャーシを作っていた。ちょうど自動車産業が隆盛を迎える時代にあって、非常な活況を呈していた。当時のトラックのシャーシは、現在の金属製ではなく木製であった。工場の中には材料になる木材が山積みになっていたという。

昭和三十六年春、このすずらん通りで児島医院が開業した。児島博士は九州熊本総合病院の院長を経てこの地に移ってきた。昭和三十六年四月に国民皆保険制度が発足したことに合わせて開業したのである。当時の初診料は六〇円。往診料が一八〇円。「芸者は呼べねど、医者呼べる」という戯言が、開業医のうちでささやかれた時代である。児島医院が開業したころ、医院の東側には木造の公営住宅が並んでいた。

栄通は昭和三十三年三月から神戸市によってコンクリート舗装された。「栄東線」として幅員六ないし七㍍の市道である。国道2号から南へ深江の町を貫いての舗装工事であった。この頃、深江の主な道は一斉に舗装された（平成二十八年九月五日神戸市建設局取材による）。出来上がった舗装は中央の幅三㍍、車一台分の幅だった。道の両側は、いわゆる地道のままで残された。側溝が整備されるのは後のことである。このため雨が降ると中央の舗装部分以外の道は、やたらと水溜りができた。因みに、このコンクリート舗装は国道43号でも同様で、アスファルト舗装となるのはずっと後とのことである。深江の道がこのような手法で中央部のみがコンクリートで白く舗装された様子を、地域の人は「フンドシ舗装」と揶揄した。

児島医院が開業した頃、このすずらん通りでは夏の七、八月の七の付く日、七、十七、二十七日の三日間に夜店が並んだ。ただ夜店が出た期間は三年ばかりのごく短い期間であった。深江駅前を抜ける稲荷筋が通勤などで賑わった道であるけれど、栄通は森市場を背後に控える深江のもうひとつの賑わいがあった道である。

◇

取材に協力していただいた方々（敬称略・順不同）

児島医院（深江本町三丁目）・田中平八（昭和二十年生まれ、現・東灘区魚崎本町）・藤本吉江（昭和十年生まれ、現・深江南町三丁目）・西土井敏（昭和十八年生まれ、現・深江南町一丁目）。このほか、多くの方々に聞き取り協力いただきました。末筆ながら御礼申し上げます。

本稿は、森口が取材執筆し、深江塾で報告、飯田一雄・松下芳子・増田行雄・大国正美の助言を得て修正し、大国正美が文章を整えたものです。

生活文化史№46④.indd　21　2018/05/21　8:27:41

図書室サービスコーナーと児童館分室設置

前号で報告した図書館の分室としてのステーションが二〇一七年八月から始まり、順調に推移している。東灘図書館は区役所の南にあり、南北交通網が不便なこともあって、開設直後から利用者から好評を得ている。

史料館だけでなくほかの図書館で借りた本を史料館で返却したり、インターネットで予約した図書を受け取ったりできるサービスで、土日の午後零時半から午後四時半まで利用が可能である。八月五日からサービスを開始、お盆休みなども取らずに開室を続けた。利用状況は別表の通りで、周知が進んだのか、二月、三月に利用冊数が急増している。

図書館サービスコーナーの利用状況

	開館日	貸出人数	貸出冊数	返却冊数
8月	8	58	163	191
9月	9	97	262	237
10月	8	89	249	298
11月	8	101	273	280
12月	8	87	212	263
1月	6	82	236	237
2月	8	131	340	329
3月	9	141	359	429

東灘区にはほかにプラザ本山市民図書室（本山地域福祉センター）にあるだけで、市民からは「とても便利」と喜ばれている。市内にはこうした拠点が一六カ所あり、二月、三月で三〇〇冊以上の貸出や返却があったのは八施設で、史料館は上位八施設に入っている。

図書の貸し出し・返却業務は個人情報を扱うことになり、神経を使う。図書は鍵のかかる書庫で保管し、利用者名と図書名を印字した伝票はきちんと保管し、毎月東灘図書館に返却している。一階の展示コーナーを一新してから、図書の受け取り・返却の際に展示ケースをのぞき込む人もちらほらと見受けるようになった。

◇

さらに四月から三階を本庄児童館分室としてスタートする。運営者は本庄ふれあいのまちづくり協議会（岡野恒義委員長）で、前田昌良児童館館長が責任者となる。平日は午後一時一五分から（長期休み期間は午前八時一五分から）午後五時一五分までで、二〇一八年度は、土曜は実施しないことになった。土曜・日曜は実施しないことで、史料館の活動とはほとんど抵触しないことが続きそうである。受入対象児童は東灘小学校の四年生以上で入会予定は一七人（うち四年生一六人、五年生一人）である。職員は二人体制で指導する。

各階に防犯カメラを設置してもらった。光熱費のうち水道代は二カ月に一回の差額を計算し年度末に請求することになった。

写真　新装なった史料館３階の児童館分室

児童館分室の設置に先立って、三階の収蔵庫を一掃、東灘区役所のあっせんで、深江浜の中央卸売市場東部市場の本棟の三階と四階にスペースをいただいた。二回にわたって引っ越し業者を頼み移転、三階は和室で施錠できるため、古文書や図書、民具などを、四階は施錠できないため農具などを収納した。

（文責・大国正美）

生活文化史№46④.indd　22　2018/05/21　8:27:41

博物館実習とトライやるウイーク

今年も甲南大学の博物館実習の受け入れと本庄中学校のトライやるウイークに協力した。今年は三階の移転があり、日程がタイトで、八月～九月は荷造り作業の合間を縫っての作業となった。

甲南大学博物館実習は、前年に続き二度目で、文学部歴史文化学科四回生の竹井章子さん、木村佳恵さんを受け入れ、八月六日・二十六日・二十七日・九月二日・三十日の計五日実習を行った。

藤川祐作研究員が史料館の説明と甲南大学周辺の地域史の座学、民俗資料約三〇点の整理、登録作業とカード作成や土器洗い、拓本作成を指導。道谷卓副館長が、大日霊女神社境内の遺跡調査と写真撮影、実測や調査を基にした展示パネルの作成、団体見学の説明の補助や一階の季節展示のコーナーを秋のお月見に展示替えした。大国は明石市史編さん室で古文書整理と撮影の実際を体験した。カメラの設定や撮影の具体的なノウハウを学んだ。最終日は古文書目録の作成と解読講義と全体のまとめを行い、古文書解読は添削して正解を送り、復習してもらった。

学内での実習報告会で、木村さんは「資料の整理を通じて、〝原秩序維持〟の大切さを知ることができた。灘五郷や西国街道などの地域史の説明も面白かった。人への伝え方や話し方も勉強になった」、竹井さんは「古文書の整理や撮影を行うことは、やり方を学ぶだけでなく、史料を扱う作法を知った。博物館だけでなくさまざまな分野で役に立つと思う」と報告した。

トライやるウイークは、六月一日、二日で、藤本航成君、前田彩花さんを受け入れ、樋口元巳、藤川祐作、水口千里の各研究員で対応、初日は展示体験、資料の整理、史料館だよりの発送、二日目は土器洗いをした。「実際に発掘された土器を洗い、いろいろな模様が出てきてとても面白かった」と感想を記してくれた。

ただ次第にマンネリ化もしている。また本来は史料館の開館日に業務をしてもらうのが本来のトライやるウイークの趣旨のはずで、閉館日に開いて業務を行い、受け入れするのがスタッフの減少で難しくなっている。二〇一八年度はこのまま受け入れ、一九年度から在り方を本庄中学校と話し合っていくことにした。

（文責・大国正美）

史料館主事・阿部英子さん死去

史料館主事として四半世紀以上にわたって会計や開館事務・図書整理を担当していただいた阿部英子さんが、二〇一七年十二月二十一日、老衰のため自宅で亡くなった。親族葬で神戸市中央区脇浜町の阿弥陀寺に葬られた。

阿部さんは、神戸商船大学の前身・海技専門学院の職員を経て、一九五二年の神戸商船大学昇格当初から勤務した。定年退職の後、一九八九年四月から川口さつきさんの後任として史料館主事となり、金・土・日の週三日間、史料館に出勤する生活を二十七年半続けた。几帳面な性格で事務能力が高く、史料館の舞台裏を切り盛りした。また大学職員時代の経験を生かして史料館の図書整理も担当。好奇心旺盛で史料館の図書を読み込み、博物館や美術館にもよく足を運んだ。甘党のグルメで、お酒は飲まなかったが、史料館の飲み会にも参加した。二〇一六年十月に胸の病気で入院、その後、圧迫骨折を起こし、自宅療養を続けていた。

阿部さん亡き後は当面残されたメンバーで何とか開館を続けているが、阿部さんの担っていた仕事の大きさを改めて痛感している。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

（文責・大国正美）

生活文化史№46④.indd　23　2018/05/21　8:27:41

史料館日誌抄

史料館副館長　道谷　卓

二〇一七年四月～一八年三月

＜二〇一七年＞

5月7日　頭にいいウォーク　（参加者　二二名）

6月1日／トライやる・ウィーク・本庄中学校二年生二名を受け入れ二日間史料館業務の体験　（見学者　二三名）

6月9日　東灘区役所職員研修

7月29日　史料館三階を一八年四月から学童保育コーナーとして利用することに伴う収蔵資料等を神戸市東部市場への移転作業を行う。

8月5日　図書館サービスコーナースタート

6日／甲南大学学生二名、博物館実習のため受け入れ～9月30日（五日間）

9月18日　史料館三階の移転作業（2回目）。館長室に折り畳み机を置き会議スペースに変更

10月1日～12月8日　史料館三階の学童保育コーナー整備工事を行う

11月11日　深江親交クラブ　（見学者　一二名）

11月20日　西灘小学校　三年生　（見学者　八四名）

12月1日　八多小学校　三年生　（見学者　二二名）

12月20日　向洋小学校　三年生　（見学者一二五名）

＜二〇一八年＞

1月18日　本山南小学校　三年生　（見学者　七五名）

1月23日　稗田小学校　三年生　（見学者　七八名）

1月24日　本庄小学校　三年生　（見学者一二五名）

1月25日　本山第二小学校　三年生　（見学者二〇〇名）

1月26日　福住小学校　三年生　（見学者　八二名）

1月29日　灘小学校　三年生　（見学者　六〇名）

1月30日　福池小学校　三年生　（見学者一〇二名）

1月31日　六甲小学校　三年生　（見学者　六四名）

2月1日　東灘小学校　三年生　（見学者一六六名）

2月2日　本山第三小学校　三年生　（見学者一五〇名）

2月5日　中央小学校　三年生　（見学者　八七名）

2月6日　宮本小学校　三年生　（見学者　六五名）

2月8日　鶴甲小学校　三年生　（見学者　六三名）

2月9日　五位の池小学校　三年生　（見学者　五七名）

2月13日　六甲アイランド小学校　三年生　（見学者　六四名）

2月15日　本山第一小学校　三年生　（見学者一一二名）

2月26日　御影小学校　三年生　（見学者一〇七名）

資料寄贈者ご芳名

（敬称略）二〇一七年四月～一八年三月

近沢孝昌／赤松恒広／木村一恵

編集後記

（藤川祐作記）

三階の集会スペース兼収蔵庫が、児童館分館になった。三階を手放すのは苦渋の決断だったけど、地域のためになるなら。一方図書館サービスはとても便利。借りたい本をインターネットで注文し、運んでもらい必要なところはコピーを取って返す。重宝している。阿部さんの喪失感は大きいけど、知恵を絞って存続を目指します（大国）。

『生活文化史』　第46号　2018・3・31

編　集／大国正美

発　行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021　神戸市東灘区深江本町3－5－7

☎　078－453－4980（FAX兼用）

http://fukae-museum.la.coocan.jp/

生活文化史№46④.indd　24　2018/05/21　8:27:41